

A. T. Fear, *Rome and Baetica: Urbanization in Southern Spain, c. 50BC-AD150*. (Oxford Classical Monographs.) Oxford: Clarendon Press, 1996.
Pp. ix + 292, 3maps. ISBN 0-19-815027-X.

渡邊麻衣子

本書は、現マンチェスター大学の古典古代史学科の講師 Lecturer である A. T. Fear が、一九九六年に刊行した共和政末期から帝政期にかけての約二世紀に渡る属州バエティカの都市化を扱った本格的な専門書である。周知の通り、属州バエティカは、他のヒスパニア二属州（タラコネンシス、ルシタニア）に比べ、あるいは、帝国内の他の諸属州に比べ、最も「ローマ化」された地域と言われる（cf. Strabo, 3.2.15）。しかしながら、ここ四半世紀の間に、スペイン・ポルトガルから考古学上の重要な発見が相次ぎ（例えば、「イルニ都市法」AE(1986), 333）、「ローマ化」が最も進んでいたとされる属州バエティカ像を再考・再評価する動きが見られるようになってきた。Fear の著作は、こうした一連の流れを受けてのものである。著者は、属州バエティカを考察する際の主要史料で

あるストラボンや大プリニウスにこれらの碑文史料・考古学的資料を加味し、バエティカは本当に「ローマ化」されたのか、ローマはバエティカを都市化する意志を持っていたのか、それに対し土着民は抵抗したのか、という論点を本書の主軸に据え、通説を改めて問い直している。

本書の構成は、序章・終章を含め、全九章から成る。具体的には、Ⅰ序章、Ⅱ都市化とローマ・概観、Ⅲ前五〇年頃における南スペインの情勢、Ⅳバエティカの植民市、Ⅴカエサルからウエスパシアヌスまで…都市の地位に関する問題、Ⅵフラウィウス自治市法…外人・ラテン人・ローマ市民、Ⅶバエティカの都市の遺構およびそれらの解釈、Ⅷバエティカにおける非ローマ的文化形態の残存、Ⅸ終章、となっている。以下、本書の構成に従って紹介を進める。

I 序章

属州バエティカは、前一六年頃、アウグストゥスにより共和政期のヒスパニア・ウルテリオルの南西部（現アンダルシア地方にほぼ相当する）から編成された。この地域は、耕作に適し、農業・樹木栽培に専ら用いられる低地として描かれることが多いが、イベリア半島内の他の地域以上に山岳地帯を有し、著しい地理的なコントラストを示す地域でもあった。バエティカの中心は、その名の由来にもなったバエティス川（現グアダルキビル川）流域にあり、ここで当該地域の収入源たる穀物やワイン、オリブオイルなどの生産が営まれた。しかし、このバエティス川流域の低地に対し、北部にはバエトゥリア（現モレナ山脈一帯の山岳地帯）、南部にはバステタニア（現アンダルシア大山脈一帯の山岳地帯）の高地が広がっており、地形が著しく変化した。

属州バエティカにおける都市化や都市生活の本質を考察する際には、一元的な領域としてこの地域を扱うのではなく、以上のような地勢上の特徴を考慮する必要があると著者は主張している。

また、自然地理的な一元性を欠くバエティカは、人種的に見ても多様な地域であった。バエティス川流域には土着民のイベリア人が、南北にまたがる高地には同じく土着民のケルト人が、そして地中海岸には半島に入植したカルタゴ人が定住していた。ローマの出現に対する当該地域の反応やその影響を見る場合にも、これらの人種的なモザイク状態が考慮さ

れねばならないと著者は指摘する。さらに、著者は支配者と被支配者が相互に取った態度を考察することが必要だと付言し、R. J. Horvathの考案した人類学上の植民地主義のモデル（まず、植民者を伴う植民地主義 colonialism と植民者を伴わない帝国主義 imperialism に大別され、それぞれが、絶滅 extermination・同化 assimilation・相対的均衡 relative equilibrium という三つのサブ・モデルに細分される。従って、このモデルには六つのカテゴリーが生ずることになる）を紹介しつつ（R. J. Horvath, *A Definition of Colonialism, Current Anthropology* 13-1 (1972), pp.45-56）、これに更なるファクター（植民の規模・地域・動機・形式など）を加える形で、属州バエティカの「ローマ化」・都市化を分析する際のアプローチの方法を提言している。

II 都市化とローマ：概観

本章では、ローマ的な都市の典型とみなされる特徴を通じて、どのようなメカニズムで属州バエティカに都市化が進んだのかという著者の論点が提示される。ローマ的な都市は、人々の集団だけでなく、三つの点で特徴付けられると著者は主張している。その三つの点とは、すなわち、コミュニティが所有した公共建造物・独立した政治生活・共通の信仰や娯楽を含む共同生活の三つである。これらは共に相互関係を持ち、公共建造物の多くが、政治生活・共同生活の場を提供し、ローマ的な都市生活を促進させた。この公共建造物を一つの

指針として、著者はまず、『学説彙纂』に挙げられる建造物が (Digesta, 50.1.27.1 (Ulpianus); 50.1.35 (Modestinus))、「ウルソ植民市法」や「フラウィウス自治市法」にどれくらい見出されるかを考察している。その結果、ローマ的な都市生活が最低限必要としたであろうフォルム・神殿・浴場・水道・劇場などの一貫した描写を、これらの法は与えるとする。また、これらの法が、都市の政務官や参事会に関する規定を含むことは、都市の第二の特徴である独立した政治生活を裏付ける。さらに、これらの法に見出される宗教上の建造物の存在や見世物に関する言及は、都市の第三の特徴である共同生活を示唆するとし、ローマ的な都市に見出される三つの特徴が、バエティカの諸都市を規定する法の文面上に表れるということを確認している。

次に、共和政末期から帝政期にかけて、バエティカで都市化がどのように、どの程度進んだのかということが問われる。その際、ローマ側に都市化を促進するための積極的な意志が果たしてあったのかということも同時に問題視される。例えば、ハドリアヌスが自身の故郷であるイタリカ Italiaにおいて新市 nova urbs を建設したことは、皇帝個人のイニシアティブによる都市化のプロパガンダ的行為とみなすことも可能である。しかし、著者はその建設の「場当たりの ad hoc」本質を指摘した上で、イタリカにおける新市の建設が、皇帝による積極的かつ一貫的な都市化政策ではなかったと主張する。また、カエサルとアウグストゥス治下でのより計画的な植民

市の建設も、ローマの内政上の問題に触発されたもので、建設に伴う当該地域のローマ的な都市生活への変化は、植民市建設の主目的ではなく、付随的な現象であったと指摘している。

以上のように、著者はローマによる積極的な都市化政策の存在を否定し、ローマのバエティカに対するアプローチを一種の「無干渉主義 laissez-faire」と見る。すなわち、ローマによる都市化は、消極的かつ非強制的であった。しかし、その一方で、ローマ的な都市生活を模倣する動きが、特に地域の上流階級を中心に促進された。こうして、バエティカの都市は、ローマ的な都市生活を営む上でローマ側の人々が必要であると考えたものと、ローマ的な都市生活を営む上で地域の土着民が必要であると再解釈したものが混合するような特徴を有した。

また、バエティカが都市を基盤とするカルタゴ人やイベリア人の土着の都市プランを既に有していたために、ローマは新しく都市という行政単位を創出する必要性に向かい合わなかったと著者は指摘している。逆に、都市を基盤としなかったケルト人が定住していたことにより、また、肥沃な低地からの孤立がローマとの接触を制限していたことにより、バエティカの高地では都市化がさほど進まなかったとする。最後に、著者は、今後の都市研究が被支配者に対する帝国権力の研究ではなく、関係する集団間の文化的な相互作用や統合の研究になっていくべきだと主張し、支配者に対する被支配者

側の反応や模倣の程度を考察する必要があると訴えている。

Ⅲ 前五〇年頃における南スペインの情勢

のちに属州バエティカが設置される南スペインは、共和政末期にここで除隊を受けた数多くのローマ人退役兵を通じて、ローマの影響を多大に受けていた。彼らは、南スペインの肥沃さや次第に悪化するイタリア内の政治情勢を理由にここに留まって定住し、ローマの影響を現地に普及させる立役者となつていった。これが共和政末期の南スペインに関する一般の見解である。しかしながら、著者はこの一般の見解を疑問視し、この時期の南スペインが果たして定住に値する地域であつたのかを問い直す作業から始める。のちの属州ルシタニアが設置される地域と南スペインとの国境付近は、絶えずルシタニアからの侵入や山賊行為の危険にさらされていた。加えて、半島南部はマウレタニアからの奇襲を被りやすかつた。また、共和政期を通じて帝政期に至るまで、当該地域の多くの都市が丘陵地に位置し、要塞都市としての性格を保持し続けた。以上の点を指摘した上で、著者は、共和政末期の南スペインが決して平定された地域とは言えず、それゆえ定住するのにも魅力的な地域ではなかつたということに注意を喚起している。

次に、この時期の南スペインに都市化を推進したとされるローマ市民の非公式の移住・鉱業従事者や農業従事者による移住・ローマ人退役兵による定住が、批判的に検討される。

まず、著者は、南スペインには既に土着の都市が存在していたため、当該地域へのローマ市民の非公式の移住が、ローマ的な都市生活への変化をさほど促進しなかつたと指摘する。

また、鉱物資源の開発に伴うイタリアからの移民の流入は、莫大なものではなかつたと述べている。というのも、鉱物資源の開発は、土着のイベリア人から労働力を獲得できた上、非常に危険なかつ高度な技術を必要とするものだったので、イタリアから移住してそのような事業に携わろうとする集団は少なかつたからである。さらに、著者はローマに輸出する農作物の貿易量が、帝政期より共和政期の方がはるかに低く、当該地域の主要産物であるオリブオイルの輸出も紀元二世紀後半に入るまで頂点に達しなかつたということに鑑みて、農業に従事するイタリア人からの移民も小規模なもので、南スペインの都市化を促進しなかつたと仮定する。除隊後、多くのローマ人退役兵が当該地域に留まって都市化を促進したという一般の見解に関しては、そもそも軍団の新兵補充のほとんどが土着のイベリア人から行われたということを指摘し、ローマ市民の軍団の編制規模は小さかつたとしている。

以上を通じて、著者はローマ市民による移住や定住の規模が概して小規模であつたことを確認し、次いでどの程度の都市化が南スペインに起こつたのかを当該地域で鑄造された貨幣を用いて検討している。共和政末期から帝政期のものや年代特定のできるこの地域の貨幣の多くが、ラテン語の銘を帯びるのに対し、その図柄はイベリア人のモチーフ（騎兵・雄

牛・イノシシ)やカルタゴ人のモチーフ(カルタゴの神メルクアルト Melqart)を保っており、これらの貨幣からは、ローマの特徴と土着の特徴との混合が見て取れる。従って、これらの貨幣は、ローマの慣習が既に確立していたというよりも、共和政末期においても不完全であったということを明らかにする。

結論として、著者は、共和政期における南スペインの大規模な都市化は見出されないとし、多くの都市が土着の特徴を保ち続けたとする。そして、こうした傾向が、バエティス川流域の低地より当該地域の高地において、またカルタゴに強く影響された地中海岸の地域において顕著であったということを描いている。

Ⅳ バエティカの植民市

本章は、属州バエティカに建設された植民市を扱う。共和政末期、のちのバエティカとなる地域に建設された植民市は、ローマにより直接組織されたローマ市民が入植した、初の大規模な定住地であった。それらは、ローマ市民による非公式の移住や個人の移住によって以前に建設された「場当たりのな」ローマのコミュニティとは異質のもので、確固たるローマのモデルに則って建設された。そこから、ゲッリウスは植民市をローマの小さなコピー、レプリカと形容した (Aulus Gellius, NA, 16.13)。

著者は、このゲッリウスの言及を受け、バエティカに建設

された植民市が、実際ローマのコピーやレプリカだったのかという考察を試みている。また、これらの植民市がどういった経緯・目的で建設され、当該地域にどのような影響を及ぼしたのかという点を問題としている。

まず、バエティカの植民市建設の経緯・目的に関し、著者はその建設を共和政末期におけるローマの内政上のコンテクストの中に位置付けている。植民市の建設は、ローマにおけるカエサルとポンペイウスの内乱に触発されたもので、好んでというよりはむしろ、やむを得ず行われた。その建設は、以前にポンペイウスを支持したことへの刑罰的な側面を持ち、カエサルに忠実な者を新しく入植させることで、当該地域のポンペイウス派の住民を監視する目的を有した。従って、当該地域を「ローマ化」するために植民市の建設が推進されたというより、共和政末期の政治上の不安定な情勢が建設を招いたと著者は主張する。

著者は、植民市が「ローマ化」という明確な目的を伴って建設されたわけではないと主張する一方、それらがローマの法や行政組織に基づいて編成された結果、意図的ではなかったが、ローマ的な都市生活を当該地域に伝える役割を果たしたとしている。そして、バエティカの植民市がゲッリウスの言及にどれほど沿うかを、「ウルソ植民市法」や都市のプランに注目して検討している。まずは、第二章同様、「ウルソ植民市法」に描かれたコミュニティが、厳密にローマのモデルに則って建設・運営される都市であった点が指摘される。

一方で、わずか約二千～三千人規模の入植者からなるコミュニティが、植民市として存続していくためには、インコラエ *incolae* やコントリブティ *contributi* として当該都市の土着民や以前に非公式に移住した者たちを法の文面に取り入れる必要があり、それゆえ植民市には雑多な住民が存在したということが主張されている。都市のプランに関しては、バエティカの植民市の大部分が未発掘であること、加えてスペインで最もよく発掘された植民市の現況に鑑みて、ルシタニアの植民市エメリタ・アウグスタ *Emerita Augusta* とタラコネンシスの植民市イリキ *Ilici* が例示され、前者がローマの都市化の急速なサインを示すのに対し、後者は対照的に土着のイベリア的な特徴を帯びていたことが指摘される。エメリタは、未開墾の新地に建設されたので、ローマの標準的な都市プランに従うことができたが、一方イリキには既に都市が存在していたので、土着の特徴が植民市に保たれることになった。著者は、この違いが二都市の間に見られる対照の理由であるとす。すなわち、エメリタのように未開発地域に建設された植民市は、建造物の分野において、厳密にローマの様式を模倣したが、一方イリキのように土着の都市が既に存在した植民市は、既存の建造物を壊して再び新築するよりも、その建造物を残したままで植民市のプランに組み入れていった。従って、土着の都市プランを温存したバエティカの植民市は後者に類し、土着住民への「ローマ化」同様、ローマ人入植者への「イベリア化」のプロセスも生じたと著者は結論付けてい

る。

V カエサルからウエスパシアヌスまで…都市の地位に関する問題

本章では、大プリニウスが伝える一世紀前半の属州バエティカの都市を中心に論が展開される。大プリニウスは、バエティカに一七五の都市があったと言及している。その一七五の都市とは、九の植民市 *coloniae*・一〇のローマ市民自治市 *municipia civium Romanorum*・二七の古ラテン権都市 *Latino antiquitus donata*・六の自由市 *oppida libertate*・三の同盟市 *oppida foedere*・一一〇の貢納市 *oppida stipendiaria* であった (Plinius, *NH*, 3.1.7)。この大プリニウスの一節は、一世紀前半にバエティカに存在した都市の数を伝えている。しかし、どの都市がどのカテゴリーに属したのかということに関して、大プリニウスは部分的にしか伝えてくれない。こうした問題に対し、著者は都市の同定を試みている。特に古ラテン権都市の同定において、著者は M. I. Henderson 説を論駁する (M. I. Henderson, *Julius Caesar and Latium in Spain*, *JRS* 32 (1942), pp. 1-13)。Henderson が都市の名前に添えられたタイトル (例えば、アウグリナ *Augurina* やケレアリス *Cerealis* など) を都市の法的地位を示すメルクマールとするのに対し、著者はそれらのタイトルを別の目的を持ったものとして検討している。すなわち、都市に与えられたタイトルは、当該都市の法的地位を指示するものではなく、バエティカ内に存在

した同じ地名を持つ別の都市、あるいはトゥッキ *Tucci*・イトゥッキ *Iucci*・イプトゥッキ *Ipucci* のような接尾辞が一致する都市、またイリトゥルギ *Iiturgi*・イリトゥルギコラ *Iitur-gicola* のようにシラブルの重複によって似たような名を持つ都市を、ローマの当局が明瞭に区別するためものだった。このような類似的な名を持つ多くの都市を区別したタイトルは、ローマ側の行政上の困難を避ける助けとなったと著者は主張する。

結論として、一世紀前半のバエティカにおける都市に関して、確信を持って同定できる法的地位を帯びた都市の数は少なく、それらは九つの植民市（コルドウバ *Corduba*、ヒスパリス *Hispalis*、アステイギ *Astigi*、トゥッキ *Tucci*、イトゥッキ *Iucci*、ウクビ *Ucubi*、ウルソ *Urso*、ハスタ・レギア *Hasta Regia*、アシド *Asido*）と二つのローマ市民自治市（ガデス *Gades*、レギナ *Regina*）、二つの古ラテン権都市（ラエピア *Laepia*、カリサ *Carisa*、ウルギア *Urgia*）だけであることが指摘される。大プリニウスの都市のリストに従えば、バエティカの都市の六八%以上が未だ非特権的な地位にあり、七三%以上がローマの法的地位を欠いていた。従って、都市の法的地位に着目すれば、ユリウス・クラウディウス朝期のバエティカは、「ローマ化」された地域というより、むしろ外国のままであったということが結びに述べられる。

VI フラウィウス自治市法：外人・ラテン人・ローマ市民

本章では、近年の「イルニ都市法」の発見を受け、「フラウィウス自治市法」をめぐる諸問題が取り上げられる。まずは、「フラウィウス自治市法」の発布の契機となったヒスパニア全土へのウェスパシアヌスのラテン権付与が検討される。この付与は七三／七四年の皇帝のケンソル在職中に行われたというのが支配的学説であるが、著者はネロによるアルペス・マリティマエへの同様の付与がケンソル在職中に行われなかったことに鑑みて、ウェスパシアヌスのケンソル在職中におけるラテン権付与を否定し、その上で皇帝の治世初期に起こったゲルマニアのキウイリスの乱やモエシアへのサルマティア人の侵入が、主に帝国東部を基盤としていたウェスパシアヌスに帝国西部の支持を獲得する必要を生じさせたとする。そして、A. B. Bosworth の見解に従う (A. B. Bosworth, *Vespasian and the Provinces: Some Problems of the Early 70's A.D., Athenaeum* 51 (1973), pp.49-78) 、ウェスパシアヌスのラテン権付与が皇帝の治世初期 (Bosworth は七〇／七一年とする)、国家の窮状に際して自身の権力基盤を強化するために行われたものであったと主張し、ヒスパニア全土を「ローマ化」するために行われたものではなかったと結論している。

このウェスパシアヌスのラテン権付与を受け、ドミティアヌス治下で「フラウィウス自治市法」が編まれた。この自治市法は、現在出土している「イルニ都市法」「マラカ都市法」

「サルペンサ都市法」など、各都市法のモデルとなった法律で、ローマの行政組織やローマ市民法の観念を採用している（例えば、都市における政務官の公職就任によるローマ市民権の獲得を扱った第二章・第二章には、手権 *manus*、所有権 *mancipium*、家父長権 *patria potestas* というローマの法的観念が現れる）。しかし、著者は、これらの都市の審判人の選定および公示を規定する「フラウィウス自治市法」の第八六章の考察を通じて、この規定が現実レベルでは履行不可能であった点を指摘した上で、「フラウィウス自治市法」を、都市が直ちに履行すべきものというより、都市が今後志すべきもの、との位置付けをしている。すなわち、「フラウィウス自治市法」は、都市生活がどうあるべきかと考えた法の起草者のビジョンを提示した青写真として作成された。

ローマ的な形式に則って都市生活を規定する「フラウィウス自治市法」が、諸都市においてどのように履行されたのかということに関して、著者は H. Galsterer の提唱する「外国人的解釈 *interpretatio peregrina*」という現象に着目している（H. Galsterer, *Roman Laws in the Provinces: Some Problems of Transmission*, in M. Crawford(ed.), *L'Impero romano e le strutture economiche e sociali delle province*, Como, 1986, pp.13ff.）。「外国人的解釈」とは、ローマの法的観念が、状況や以前の土着の慣習に応じてルーズに解釈されたことを指す。こうした事態は、ローマ法に精通した政務官が当該地域にほとんど存在せず、係争問題に関しても参照できる法史料が二

世紀以前は少なかったために引き起こされた。著者は、「フラウィウス自治市法」の中でも、公職就任によりローマ市民を輩出することになる都市の政務官を規定するセクションが、当該都市において理解され固守されてさえすれば、中央のローマから介入を見ることはなかった、従って、法の残りのセクションは、「外国人的解釈」に陥りやすかったとする。

また、著者は「外国人的解釈」が、ローマとの接触の度合いによって大きく左右された可能性を指摘している。貿易によつて広範にローマと接触したバエティス川流域の都市では、ローマの法的観念が理解され遵守されたので、「外国人的解釈」に陥ることは少なかった。一方、ローマとの接触をより困難なものにしたバエトゥリアやバステタニアの山岳地帯に位置した都市は、「外国人的解釈」の度合いが高かった。このように、著者は「外国人的解釈」という現象を、ローマに対する土着民の抵抗というより、ローマとのコミュニケーションの欠如が招いた法の無知によるものとしている。

以上より、「フラウィウス自治市法」は極めてローマ的な形式を内容的に持っているけれども、この通りに法が実施されたという確証はなく、「外国人的解釈」に応じて法の遵守の度合いも異なったということが本章を通じて強調されている。

VII バエティカの都市の遺構およびそれらの解釈

本章の前半部分では、スペイン南部で発見されたフォルム・

浴場・水道・神殿・円形闘技場・劇場といったローマの都市に特有とされる建造物や施設の遺構がタイプ別に分類され、その後半部分では、そのような遺構が何を物語っているのか、どう解釈できるのか、ということが論じられる。

著者は、以上の考察を通じて、バエティカにおけるローマ的な建造物が、分布の点で一様ではなかったということを突き止めている。バエトゥリアやバステニアの高地においては、ローマ的な建造物がほぼ欠如している一方、バエティス川流域と地中海岸の低地においては、そのような建造物の高い発生率を見て取れる。これは、バエティカの半分以上を占める高地が、地勢・土壌の劣悪さ・人種構成によってローマ的な建造物を建設する困難を有したからであった。起伏の激しい地勢は、建築資材の供給を困難にし、乏しい地味はローマからの関心を買わず、この地の住人であるケルト人は、低地のイベリア人やカルタゴ人と違って、都市を基盤にした生活を送っていなかった。一方、バエティカの低地には、多くのローマ的な建造物が集中したが、この地域内においてすら、建造物の分布に関し、様々なパターンが指摘できると著者は主張する。すなわち、ローマの建造物は、低地の都市でも主に裕福な大都市に限られる傾向があった。これは同時に、より小さな都市が、十分な都市の財源やエヴェルジェティスム（施与慣行）を通じて造営事業を行えるだけの裕福な個人を持たなかったということを意味した。

また、著者は、都市におけるローマ的な建造物の建設に関

しても、段階的なプロセスが取られたわけではなく、建設に対する特別な機会が生じた時（例えば、イタリアにおける新市の建設）、「場当たりの」行われたものだったと指摘し、都市化のクロノロジーにも一貫した傾向が見られないとしている。

VIII バエティカにおける非ローマ的文化形態の残存

本章では、バエティカに定住していたカルタゴ人・イベリア人・ケルト人の文化形態の持続性が検討される。著者は、まずカルタゴの文化がとりわけ宗教などの側面において根強く残存し続けている事実から、ローマ側にはその文化的特性をローマ標準に強制する意志はなく、それゆえカルタゴ人も自らの文化的特性を放棄する必要がなかったと主張している。また、著者はこの文化的な保守傾向が、ローマの慣習を意識的に模倣してもあまり見返りを得られなかったであろう土着の下層階級の間で顕著であった可能性を指摘している。一方で、著者は宗教のような非行政的な分野においても、ローマと土着の文化形態の混合が見られるという点を指摘した上で（例えば、メルクアルトとヘラクレスの習合など）、それは「ローマ化」のプロセスか「土着の抵抗」かのどちらか一方の観点で判断するのは難しいとし、混合の現象をキューバの社会学者 E. Ortiz が提唱した「文化変容 transculturation」という用語をあてて双方向のプロセスに位置付けようとしている (E. Ortiz, *Contrapunto cubano del tabaco y el azúcar*, Santa

Clara, 1963)。

次に、イベリア人とケルト人の土着の信仰の考察を通じて、女神アタエキナ *Ataecina* のような土着の神々が、バエトゥリアやバステタニアにおいて強く信仰されていたことが指摘される。これらの地域はまた、ローマ的な建造物や彫像、碑文を欠く地域でもあった。一方、これらの地域と対照的に、バエティス川流域は、ローマ的な建造物や彫像、碑文が集中した。この相違から著者は、バエトゥリアやバステタニアの高地の都市とバエティス川流域の都市の間に、「ローマ化」の異なる度合いを見ている。前者の地域においては、都市の数は少なく、この地域に分散して存在した都市の多くが、ローマ的な都市を特徴付ける建造物を持たなかった。一方、後者の地域には、多くの都市があり、ローマ的な建造物を持つ都市も多かった。また、この地域における上流階級は、ローマ文化の摂取の度合いが高かった。

著者は、そのようなローマ文化の摂取が、「上意下達式」の現象というより「下意上達式」の現象であったと主張している。支配する側よりも支配される側の方が、意識的な「文化変容」における推進力となった。従って、「ローマ化」は、ローマの政策ではなく、バエティカのコミュニティ自身がローマを模倣することで私益の追求を図った産物であった。また、著者はバエティカの土着の文化に対するローマのインパクトを「ローマ化」対「土着の抵抗」という二極の観点から考察する危険性を指摘し、バエティカとローマの二つの文

化が混合して第三の新しい文化を形成する「文化変容」の観点から捉え直す必要性を提言している。

Ⅹ 終章

終章では、ローマ側にバエティカを都市化する意志はなく、バエティカは一般に推測されるよりローマに影響されなかったということが確認される。そして、当該地域に起こった都市化の様々なファクターが再度言及されている。

バエティカにおけるローマ的な都市生活への変化は、「下意上達式」のイニシアティブによって起こったものであり、支配者側からではなく被支配者側から生じたものであった。また、当該地域の都市化の度合いは、各地域によって異なるものであり、中でもローマに非常に影響されたのは、バエティカの最も肥沃な地域であるバエティス川流域だった。というのも、そこは、ローマから多くの入植者を招き、ローマと一番接触を持った地域であったからである。バエティカにおけるローマ的な建造物の大多数がこの地域で発見されたことは、これらの建造物を建設できるだけの財産を所有した地域の上流階級が存在を暗示する。ローマ的な都市の生活様式を積極的に摂取したのは、この者たちであった。

以上より、伝統的な土着の都市生活からローマ的な都市生活へ変化するファクターは、地勢により左右されたローマとの接触の度合い・ローマ的な都市の生活様式を摂取したいという「下意上達式」のイニシアティブ・その摂取を実行しう

る財政力であった点が指摘される。

そして、著者は序章で紹介した Horvath のモデルが、多様なバエティカの社会に完全には適用できないことを指摘した上で、「ローマ」対「非ローマ」の二分法によるアプローチもバエティカの都市生活の様相を描くのに不十分であるとす。代わりに新たな視点からの考察、すなわち、Galscherer により「外国人的解釈」と称された現象、および Orin により提唱された「文化変容」の観点からの考察の必要性を説いている。そして、バエティカは完全にローマ的な社会に移行したわけでも、相変わらず土着の社会を保ち続けたわけでもない、それぞれの文化が混合し複雑な相互作用を持った社会であったと著者は結論している。

以上のように、本書は属州バエティカに地理的・人種的・文化的な多様性が存在したことを強調しつつ、当該地域の都市化について考察を試みた問題提起の書である。本書を通じて提起された問題は、しばしば単線的に「ローマ化」されたプロセスとして描かれるバエティカの都市化に再考を迫るものである。しかし、これは専ら当該地域の史料／資料の欠如に起因しているものであるが、著者の議論からは、非常に方法的・思弁的・推論的な印象を評者は受けた。また、全体的に議論の焦点が散在化しており、一貫した論理が見出されていないように感じた。著者は、バエティカにおける都市化を地域の上流階級による「下意上達式」の現象と主張するが、

こうした現象の前提には、ローマ的な都市生活を模倣することとで、地域の上流階級がローマ世界のヒエラルキーへ参入できるという期待があったということになる。しかし、著者も本論で認めていることだが、そもそもローマ的な都市生活を模倣することでローマのヒエラルキーへ参入できるという前提を、ローマ側が地域の上流階級に確約していたとは断定できないのである。従って、なぜ地域の上流階級が都市化を推進したのか、果たして本当に彼らが都市化の推進者であったのかということから根本的に問い直してみなければならぬ。また、バエティカにおける都市化の特徴全てを「下意上達式」の現象として一様に説明できるのかという疑問も残る。というのも、著者の分析の視点は、「バエティカの都市とローマ」というマクロなところに置かれており、在地の都市内部の動態を軽視しているように思われるからである。著者も指摘するように、地域の下層階級の間でローマ以前の文化的特性が強く保持されていたと仮定するならば、地域の下層階級による「下意上達式」の都市化の現象は見出されないということになる。従って、都市内部の動態に着目したミクロな視点からの考察も必要であっただろう。また、L. A. Curchin が本書に対する書評で指摘しているように (A/Pn 119 - 1 (1998), pp. 143-145)、土着のイベリア人やカルタゴ人がローマの出現以前に既に都市を基盤にした生活を有していたというならば、当該地域が「都市化」したというよりも、ローマ的な都市生活へ「都市の変容」があったとすべきで、その上で、土着の

諸都市がどのように、どの程度ローマの出現によって影響されたのかということが問われねばならないだろう。

本書の構成に関しても不十分な点がある。本書の冒頭には、バエティカの地図が付されているが、これは他者の論文からの引用であり、必ずしも十分に本論で言及された都市をカバーしていない。本書への理解を助けるためにも独自の地図の作成が必要であつただろう。また、とりわけバエティカの都市の遺構を論じた第七章においては、都市のプランや遺構の図面を適宜挿入する必要があつたように思われる。

とは言え、属州バエティカの都市化に関して本書が提起した問題は、バエティカのみならずヒスパニア全土の都市化や帝国内の他の属州における都市化を考える上で裨益するところ大きく、本書が今後ローマ・バエティカ史の研究や属州の都市研究において有益な一書となるであろうことは確かである。